(3)戦争とインテリ

この頃の加藤がノートに書きつけた戦争に関わる文章は「国家と文化（下田講師の問題に関する草稿)」(「ノートⅣ」）や「戦争に関する断想」(「ノートⅤ」)、「その後に来るもの」(「ノートⅤ」)、「一九四一年」(「ノートⅧ」)、「「学生と時局」と云ふ目下流行の問題に関連して」（「ノートⅧ」）といったものだった。

加藤が綴った「戦争」とは、主として第一次大戦のヨーロッパであり、1930 年代の第二次世界大戦を控えたヨーロッパの状況だった。また源実朝の『金槐集』を取りあげ、実朝の孤独について記した。

日本を離れ、現在を離れた主題を設けて戦争を論じた理由はふたつあるだろう。ひとつはその頃の加藤が主としてヨーロッパ文学、ヨーロッパ思想、ことにフランス文学、フランス思想に関心を寄せていたということ。もうひとつは、直接的に日本の問題を論じることを――まったくなかったわけではないが――なるべく避けようとしたことに違いない。

その状あたかも戦時下に、林達夫（はやしたつお）がキリスト教文化史研究に力を注ぎ、渡辺一夫が 16 世紀フランスの文学に分け入り、石川淳（いしかわじゅん）が江戸文学に遡り、丸山眞男（まるやままさお）が江戸時代の政治思想に進んでいったことと軌を一にするように思われる。言論の自由のないところでは、知性は現在に向かわずに、歴史をさかのぼる。

しかし、フランスについて述べ、源実朝を論じるときにも、いつも戦争に突き進む当時の日本を念頭に置いていたに違いない。当時の心境について、のちに次のように綴っている。

いくさはいよいよ酣（たけなわ）となり、日本の文壇は軍国主義と妥協したり、それを煽（あお）ったりしていた。そのすべてが――もちろん例外が全くなかったわけではないが――私には本来の意味での文学とは思われなかった。身の周りには同時代の文学がない。やむことをえず、私は、あるいは私たちは、フランス文学のなかに同時代を見出そうとしていたのであろう。いつ兵士として召集され、戦場であるいは戦場に向かう途中で、殺されるかわからないという状況のもとでは、自分自身と同じように感じる人間が、地上のどこかに生きて呼吸していると感じることが、生きてゆくために必要な条件の一つとなる。(「フランスから遠く、しかし……」『パリ 1930 年代』岩波新書、1981 年)

源実朝論も「ノートⅧ」に書き、『しらゆふ』に発表したが、源実朝の『金槐集』は、加藤が愛読していた古典のひとつである。愛読した理由はふたつある。ひとつは加藤自身も戦争が進むなかで、自分もいつ死ぬかわからないという実感があり、源実朝の孤独と死の予感の意識と共通するものがあったこと。もうひとつは、当時、『万葉集』人気とともに『金槐集』も人気が高かった。それは『金槐集』の一部の歌が万葉調だといわれていたからである。そういう風潮に対する批判として書いたこと。この二つである。